

業および女子事務員であつた妻の四百七十五圓四十錢および四百四十八圓が多いが、全體の平均結婚費用四百七十九圓五十錢よりは僅少ながら少い。結婚前にその他の職業にあつた妻の結婚費用はいづれも三百圓以下であつて、殊に結婚前において女子事務者、家事使用人および農業に従事してゐた妻の結婚費用はそれぞれ僅かに二百十圓七十錢、二百二十二圓二十錢、二百二十四圓四十錢に過ぎない。

次に結婚費用總額に對する自己負擔の割合を見ると、全體の平均では一割五分七厘である。しかしこの割合は結婚前における妻の職業によつて大なる差等があるのであつて、結婚前に無職であつた妻は、その他の職業の妻に比較して最も多くの結婚費用を使用してゐるに反して、自己負擔の割合は最も少く、僅かに九分九厘、すなはち一割未満である。これに反して結婚前に中小商工業者であつた妻は結婚費用の五割八分強を自ら負擔してゐる。これに次いで女子事務者の四割八分、家事使用人および女子事務員の四割二分強が多い。これによつて見れば、職業婦人は、結婚費用の全部を自ら準備するまでには立ち至つてゐないが、大體において、結婚費用の四割乃至六割を自ら負擔してゐる。ただ結婚前に自由業に従事してゐた妻においては、結婚費用に對する自己負擔の割合は比較的に少い。また結婚前に農業に従事してゐた妻も、結婚費用に對する自己負擔の割合は比較的に少いが、結婚前に農業に従事する農村婦人は謂ゆる職業婦人とはその性質を異にしてゐるであらう。従つて結婚費用に對する自己負擔の割合を問題にする場合において、農村婦人は他の職業婦人と區別することが適當でないかと考へられる。

社會生物學見地より見たる

滿洲開拓農村

第二報・開拓農村人口の

年齢構成に就て

笠 間 尙 武

一、緒 言

著者は先に滿洲開拓農村の社會生物學的研究の第一歩として、開拓農村の母性乳幼児の社會衛生的研究をなし、開拓農村の結婚並に妊娠出産に就て報告したが、その際特に痛感したる事は開拓事業の成否はその本來の目的に鑑み日滿兩國に及ぼす影響は頗る大なるものあれば、國民の開拓事業への理解と本事業達成に對して全ての階層の努力と協力が全幅的に傾注されねばならぬといふ事である。殊に從來の開拓政策は兎もすると農業經營に重點が置かれ、従つて指導方針も營農に偏倚する傾向があつた様にも思へるのであるが、眞の開拓政策の實行には先づ營農の要素中最も肝要なる人的要素の完備が第一とされるべきであり、従つて開拓農村の保健問題に就て充分なる指導育成が行はれ、更に將來の開拓農村が質的にも量的にも健全なる發達を遂げしめんが爲の科學的政策根據が必要とされ、將來健全なる人口の年齢構成を得る事を目途とせる開拓政策こそ望まれるべし。

きものである。著者は開拓農村の社會生物學的研究の第二報として開拓農村の人口の年齢構成の現状及推移に就いて觀察し得たる結果を述べ、同じ機會に滿洲國民生部の厚意に依り調査し得たる滿洲人農村の人口の年齢構成を比較對照し、開拓農村の人口状態を明かにせんとするものである。

二、文獻及研究資料

一國又は一地區の人口状態を論ずるに際して、その國家及び地區の人口の健全性及將來性を思惟せしむる目安の一ツとして該人口の年齢構成をとる事は已に諸家に依り用ひられたる事で、各種の事例が擧げられてゐる。

年々の出生數が死亡數より多く、即ち人口が年々自然増加の状態を示し且つこの自然増加の傾向が何等變化なく繼續する場合、その人口の年齢別分布を見ると、年齢の幼少のもの程多く、年齢の長ずるに従つてその數を減少する事は理の當然の事であつて、この状態を圖示する場合に於て横軸の左右に各性別に人口數をとり、縦軸の下より各年齢をとり、各年齢階級の員數を見ると兩性共略、均等に分布し、然してこの兩者の分布度は年齢の増加と共に減じ、その形狀は略、二等邊三角形に似たる形となり、所謂人口の年齢構成のピラミッド型を示す事となるのである。今こゝに昭和十年の國勢調査報告より日本内地の年齢別人口をとり表示すれば第一表の如くなり、その年齢構成を見ると、男女合計數にて〇—四歳の最少年齡階級の員數は全人口の二三・四七%に及び、全ての年齢階級中最も多く、次いで五—九歳の一二・三三%、一〇—一四歳の一一・一〇%と年齢階級の長ずるに従ひて員數の占める割合を減じ、七〇—七四歳一・三二%、七五—七九歳〇・八一%となるに至り、八〇歳以上の高年齢者は全體の〇・五二%の少なきに過ぎない状態であつて、この事は男女各性夫々に就ても見られるもので、圖示する事によらずとも明かに年齢構成のピラミッド型を示す事を推

察する事を得、我が日本民族は昭和十年の現在人口よりすれば、悠久なる將來と健全なる發展を思惟せしむるものあるを知るのである。

第一表 日本内地人口年齢構成(昭和十年)

年齢	男	女	計	百分比
〇—四	四,七二四,〇〇一	四,六二四,五〇〇	九,三三八,五〇一	二三・四七
五—九	四,三〇三,六三五	四,三三八,一五六	八,五九一,四九一	二一・三三
一〇—一四	三,八六六,七四〇	三,八〇八,四七三	七,六六五,二一三	一九・二〇
一五—一九	三,三五四,七三三	三,二九〇,二〇四	六,六四四,九三七	九・五九
二〇—二四	三,〇三六,七三三	三,〇三四,二八八	六,〇七〇,〇二一	八・七七
二五—二九	二,六〇〇,二四八	二,五六九,八三五	五,一七〇,〇八三	七・五七
三〇—三四	二,三九四,九三二	二,二五三,一四五	四,六四八,〇八七	六・六九
三五—三九	二,〇〇三,四四六	一,九五三,四〇〇	四,〇四六,八四六	五・八四
四〇—四四	一,七二七,六七	一,六八八,六八四	三,四一六,〇一一	四・九二
四五—四九	一,五九一,二七九	一,五二二,六五五	三,一一三,九三四	四・四九
五〇—五四	一,四〇四,七三六	一,四二六,四九九	二,八三二,二三五	四・〇九
五五—五九	一,二五五,〇九三	一,三三六,〇四五	二,五九一,一三七	三・七一
六〇—六四	九六八,三〇〇	一,〇三三,七七一	一,九〇二,〇七二	二・七九
六五—六九	六〇〇,〇〇八	七五七,〇八四	一,三五七,〇九二	二・〇〇
七〇—七四	三九四,三三五	五一九,三〇〇	九一三,六三五	一・三三
七五—七九	三四八,八九	三三六,九七五	五六五,八六四	〇・八一
八〇以上	二五二,五九九	三三七,三八一	五六〇,三八〇	〇・五三
計	三三,七四一,三三三	三三,五二〇,二二五	六七,二六一,五五八	一〇〇・〇〇

年齢構成がその國又は地區の將來性を思惟せしめ、その發展性の目安となるの他に、又後述の如くその地區の保健状態、社會状態をも推測する事が出来れば、健全なる年齢構成は保健衛生上にも社會經濟上にも必要の事であつて、殊にこの傾向は農村に於て著しく、老若男女完全に揃つた人口こそ農村にとりて期望される事である。

本邦に於ての移住民に就て、その人口状態を年齢構成より觀察したるものは著者は寡聞にして知らない。唯大阪府社會課が昭和七年六月施行せし在阪朝鮮人の生活状態調査の報告中に、被調査對象の年齢別人口數を示したるものがあるが、その年齢構成を見るに五—一九歳の年齢階級に出入部のある事が認められるが、その原因に於ては説明してゐない。

滿洲開拓農村に於ける人口の年齢別構成は如何なる状態にあるかといふに、これに就ての文獻も少なく、唯僅かに年齢構成圖のみが第二次開拓團瑞穂村及び第七次開拓團四家厚大目和村の二村に就て滿洲開拓年鑑に見る事が出来るが實際數は掲げてゐない。開拓民全體に就いて、統計の示すところを掲げれば、團員の年齢別度數分布及一家の構成家族の年齢別分布は第二表、第三表の如くになつてゐる。

第二表 世帯主たる團員の年齢別度數分布

(昭和十四年四月三十日)

團員數	總數	二二一	二六	三一	三六	四一	四六
合		二五	三〇	三五	四〇	四五	上

第三表 團員の一家の構成状態 (昭和十五年一月一日)

團員	妻	家				計
		一—五	六—九	一〇以上		
總數		七四九〇	九二四	一九二	四四三	三〇五六
割合		四三三	三三六	二七六	一四四	一〇〇〇

以上の二表より考按するに開拓農村に於ては、その世帯主たる團員は何れも若くして、平均年齢も二九・二〇年に過ぎず、然してその家族構成人員に就て見るに、高齢者及學齡子女は到つて少くして、夫婦とその子供のみに過ぎない現状である。この點洵に元氣に満ちた村とも考へられるが、

保健衛生的見地より見ると開拓農村は、妊娠・出産・哺育に關して殆ど無經驗者の集りであつて全ての點でその不合理性が表れて來てゐるのである。理解無き老人は無きが可なりとも著者等が農村の保健指導に當るに際して感ずる事もあるが、保健施設の完備しない土地に於ては妊娠・出産・哺育に關する指導者、援助者としての老人の效果はその缺點を補つて餘りあるものであり、又高齢人口の存在は單に保健衛生的方面のみならず、營農方面に於ても重要な意義を有し、妻は入植後一、二年は夫と共に勞働力の一部を負擔し耕作に従事するが、初兒を分娩するに到りその勞働力は育兒家事に専心するの止む無き結果殆ど零に等しくなり、殊に初兒が乳兒期に入るに及び、その哺育監督に當るものは父母たる夫妻の他なく、育兒に専心せる夫妻はともすれば營農に於て不充分であり、營農に成功せる夫妻は育兒に失敗するが如き結果となり、開拓農村に於ては乳兒死亡より幼兒死亡が多く、然もその月別分布を見ると六一—一〇月の農耕期間に多いとの結果を來してゐるのである。以上單に保健・營農の點のみならず、開拓農村の將來を考へる場合、完全なる人口の年齢構成こそ望ましく速かにその達成が期望される時、開拓農村の人口年齢構成を明かにする事は開拓農村の現在及將來を論ずる上にも必要の事と思はれるものである。

此處に報告する開拓農村は著者が視察したるもの、内第一次彌榮村及鐵道自營村たる山市を除きたる千振、哈達河、黑臺、宮城、樺林の五ヶ村であるが、念の爲め各村の入植年次、入植時期、入植地、出身地を再録すると次の如くである。

團又は村名	入植年次	入植時期	入植地	團員出身地及府縣
千振	第二次	昭和八年五月	三江省樺川縣	東北(六)、關東(五)、中部(二〇)、九州(三)
哈達河	第四次	昭和十年六月	東安省密山縣	全國(二五)

黑 塚 第五次 昭和十一年七月 同 前
 宮 城 第六次 昭和十二年七月 三江省鶴立縣 近畿(五)、關東(五)、宮城、長野
 樺 林 第八次 昭和十四年二月 牡丹江省寧安縣 香川縣(栗熊村分村)

これ等五ヶ村に於て著者は開拓團本部に於て戸籍謄本控、出生届簿、團員名簿及家族名簿等備付の諸記録より村内人口に就て氏名、族柄、性、出生年月日、入植年月日を謄寫、一方團員移動調より死亡、退團、歸團者に就てその年月日及び現在人口と同様の記入をなし、この裏帳を以て村内各戸を巡訪、又は團本部長、醫師、保健指導員、部落有志より附近都會への出稼等の不在人口を聴取、除外し出來得る限り完璧を期した。尙この際千振、樺林の二開拓團の調査に當りては滿洲國民生部厚生司の鈴木隆氏の大なる援助を得た。こゝに深謝の意を捧げる次第である。

一方比較對照の爲に掲げたる滿洲人農村の人口年齢構成は民生部厚生司初治漢事務官等によつて行はれたる滿洲農村保健社會狀況調査の結果の一部であつて、その方法は各戸を巡訪、備付の戸口簿により現住人口に就て、性、年齢、族柄等を調査したるもので、著者等は之が立案に協力又調査に同行、助言をなしたるもので、調査したる村は牡丹江省寧安縣張家村、龍江省泰來縣老基街、奉天省海城縣虎莊村の三村であるが、こゝには張家村のみを擧げ参考とする事とした。

三、開拓農村現住人口の年齢構成

一、第二次千振開拓團

第二次開拓團千振街の昭和十五年八月末現在の人口數は、男八二九名、女六六三名、合計一、四九四名(生年月不明の男八名、女六名を除く)にして、男女の割合は男五五・五六%、女四四・四四%である。之を年齢別(五

歳階級)に分つと第四表の如く、第一圖は之を圖示したるものである。

千振街の年齢構成圖を見て直ちに氣付く事は壯年者即男にありて二五—三四歳、女にありては二〇—二九歳の階級に於て急激なる膨出と反對に五—一九歳の凹入と、〇—四歳の乳幼児の年齢に於ける壯年人口以上の凸出である。この千振街の人口年齢構成を第一表の日本内地人口の年齢構成と比較すると、日本内地人口年齢構成の各年齢人口の百分比は〇—四歳の一三・四七%を最高に年齢階級の進むに従ひて遞減的にその割合を減じてゐるに反し、千振街人口の年齢構成に於ては〇—四歳の占むる割合三二・五七%最も多く、内地人口の占むる割合の二倍以上に及び之に反し五—九、一〇—一四、一五—一九歳の三階級に於ては著明なる減少を示し、二〇—三四歳の三階級に於ては又内地人口の夫れの二倍以上の割合を示し、殊に二五—二九歳の年齢階級に於ては〇—四歳に次いで二三・一九%を占むるの多きに亘つてゐるが、四〇歳以上に於ては何れも内地人口よりその占むる割合は少いのを見る事が出來るのである。今比較を便にする爲に各年齢構成に就て、〇—四歳、五—一九歳、二〇—三九歳、四〇歳以上の四階級に分ち、その年齢階級の人口の占むる割合を計算すると

日本内地	〇—四歳	五—一九歳	二〇—三九歳	四〇歳以上
千 振	一三・四七	三三・〇一	二八・八七	二五・七五
	三三・五七	八・五一	五六・五一	二・四一

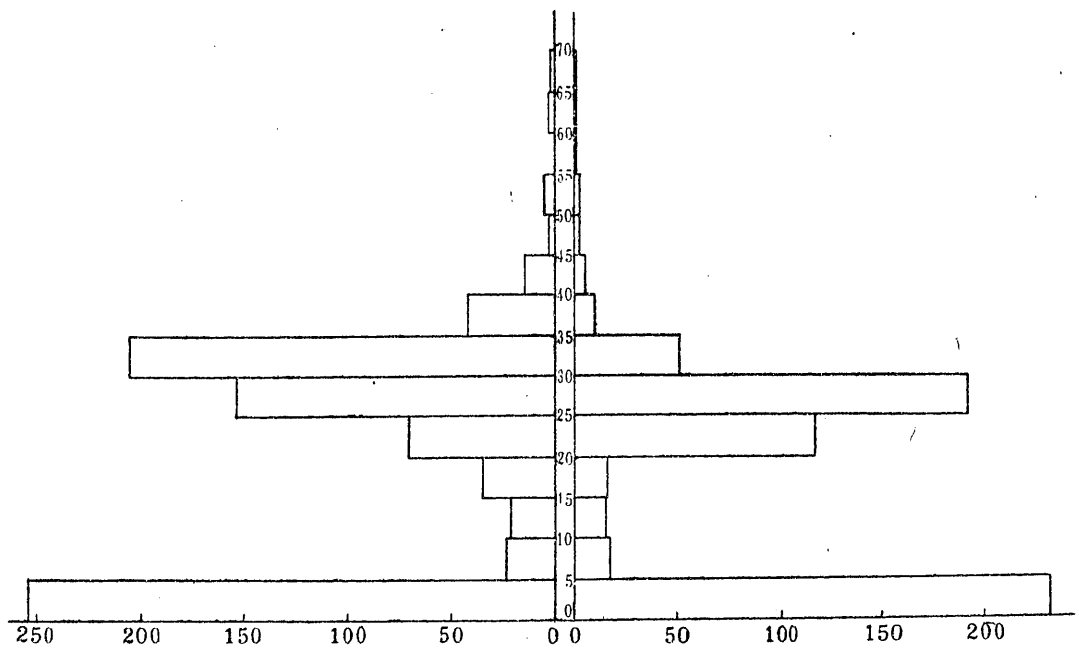
となり、前述したる關係が割然と知る事が出來、千振街に於ては日本内地一般に比べて乳幼児が多く、學齡兒、青年少く、壯年者多く、然して壯年以上殊に老人少ない事を見る事が出來、これは第二表、第三表より開拓民全體に就て見らるゝ事と同様であつて、一般の開拓農村の人口の年齢構成も之と大體同じものと推察して可なりと思へるのである。

第四表 第二次開拓團千振街現住人口年齢構成

年齢	男	女	計	百分比
0-4	254	232	486	33.57
5-9	23	17	40	2.68
10-14	21	15	36	2.41
15-19	35	16	51	3.42
20-24	70	18	88	5.96
25-29	154	19	173	11.63
30-34	206	51	257	17.33
35-39	42	10	52	3.49
40-44	14	5	19	1.27
45-49	2	2	4	0.27
50-54	5	2	7	0.47
55-59	1	1	2	0.13
60-64	2	1	3	0.20
65-69	1	1	2	0.13
計	829	663	1,492	100.00

かゝる年齢構成の特異性の因つて來れる原因を考究するに、千振開拓村は第一次の彌榮村と共に滿洲開拓の試験移民とも又武裝移民とも言はるゝが如く、昭和六年九月柳樹溝に勃發せる滿洲事變の捲き起こした滿洲の政治經濟的變革に對し見透しがつくと同時に、昭和七年この新事態に速應し滿洲開拓の烽火が擧げられ、各方面の急激なる活動により送致せられたる第一次彌榮村に次いで昭和八年編成渡滿したるものにして、當初の移住民は彌榮・千振の二村共武裝移民の名稱の示す如く、その目的とする所は滿洲國の治安未だ全からず國軍の整備不充分にして、一方此れを支援する駐屯軍も種々の關係上常時責に當る事不可能なれば、現役軍人に代りて滿洲

第一圖 第二次開拓團千振街現住人口年齢構成圖



國軍を援助するを以て第一としたる爲、その成員は現役終了せる在郷軍人を以てし、その組織も軍隊同様に大隊編成をとつたものである。これが爲最初の入植者は全て三十歳以下の未婚者が殆ど大部分で、既婚者は到つて

少く僅かに指導員、技術員の家族の二・三に過ぎなかつた状態である。この状態を明かにせんが爲、千振開拓團の入植後約一年を経たる昭和九年八月末現在の人口数を見ると、總人口二六二名中、男二五二名、女一〇名であつて、その年齢構成も團員の二〇―二九歳が大部分を占め、他に僅かに三〇―三四歳のものを加へるのみで、他は數へるに及ばぬ程度の少數であつて、第五表の示す通りである。尙第五表は、昭和十一年八月末、昭和十三年八月末現在の千振開拓團の人口数及その年齢構成をも隔年別に示したるもので、即、千振開拓團の人口増加の状態を示すもので、尙第二圖は昭和九年より昭和十五年迄の人口の増加の状態を第四表、第五表により圖示したるものである。

この第五表及第二圖に就て千振開拓團の人口増加の状態を観察すると、

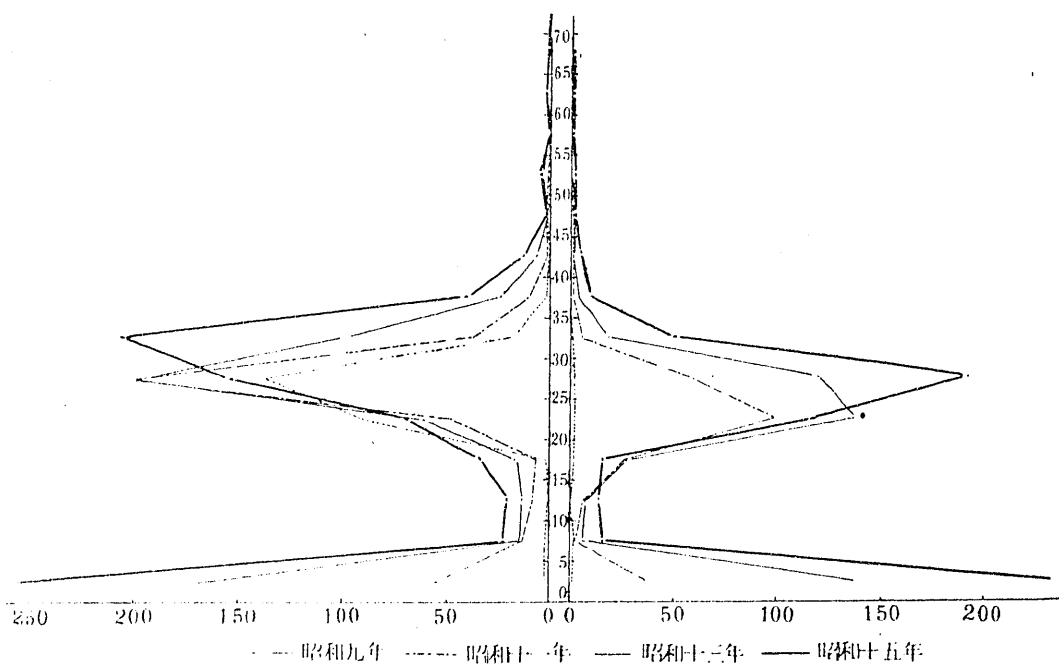
第五表 千振開拓團隔年別人口年齢構成 (各年度八月末現在)

年齢	昭和九年		昭和十一年		昭和十三年	
	男	女	男	女	男	女
〇―四	二	一	五六	三八	一七〇	一三七
五―九	二	二	一四	三	一五	七
一〇―一四	一	一	八	七	一四	八
一五―一九	一	二	六	二七	一六	二八
二〇―二四	九〇	二	四八	一四九	六一	一三八
二五―二九	一三七	二	二〇二	五八	一九八	一三〇
三〇―三四	一八	一	三八	六	九九	一九
三五―三九	一	一	一〇	四四	二四	四
四〇―四四	一	一	一	一一	六	一
四五―四九	一	一	二	一	一	二
五〇―五四	一	一	一	一	四	一
計	二五二	一〇	三八六	二九一	六〇八	四六四

年齢	昭和九年		昭和十一年		昭和十三年	
	男	女	男	女	男	女
〇―四	一・一五	一・一五	一三・八八	一七・〇	一三・七	二八・九一
五―九	一・五三	一・五三	二・五一	一・七	二・二二	二・〇七
一〇―一四	一	一	二・二二	一・五	二・二二	二・〇七
一五―一九	一・一五	一・一五	四・八七	一・六	四・一四	一・一四
二〇―二四	三五・一一	三五・一一	二九・一〇	六一	一三八	一九九
二五―二九	五三・〇五	五三・〇五	三八・四〇	一九八	一三〇	三〇八
三〇―三四	七・二五	七・二五	六・五〇	六	九九	一九
三五―三九	〇・三八	〇・三八	一・六二	一一	二四	二八
四〇―四四	一	一	〇・三〇	二	六	七
四五―四九	〇・三八	〇・三八	〇・四四	一	一	二
五〇―五四	一	一	〇・一五	一	四	一
計	一〇〇・〇〇	一〇〇・〇〇	一〇〇・〇〇	一〇〇・〇〇	一〇〇・〇〇	一〇〇・〇〇

昭和九年より二年を経たる昭和十一年に於ては、人口数は六七七名と約二倍半の増加を示し、男三八六名、女二九一名となり、増加の状態は女子に於て著明であつて昭和九年に於ける男女の割合は男九八・二%、女一・八%なるに比し昭和十一年に於ては男五七・〇%、女四三・〇%と急激なる増加を示してゐる。これは入植後既に三年を経過してゐるので、先遣隊入植者の大部分は家族を招致して、この結果女子の數が増したものであるが、前言之しが如く殆ど未婚者のみの團員であれば、その招致入植したるものは妻であつて、その年齢も男子の二〇―三四歳に對し略一年齡階級の低き年齢のものが大部分である。入植したる未婚の團員が妻を迎へる迄の期間に就ては第一報に述べたるが如く、大部分は一―三年の間であつて平均年數は二・四二七年である事より、早きは已に第一子を擧げ、昭和九年の現在人口

第二圖 千振開拓團隔年別現住人口年齢構成圖



に見られざる〇―四歳の乳幼児期年齢のものを見る事が出来、妻以外の家族も入植し學齡期の子女及壯年以後の人口も表れて來てゐる。

更にこれより二年を経たる昭和十三年に於ては總人口一〇六二名(生年

社會生物學見地より見たる滿洲開拓農村 第二報・開拓農村人口の年齢構成に就て

月不明の男八名、女六名を除く)となり、約五〇%の増加を示し、男女の割合は男五七・三%、女四二・七%にして、昭和十一年と大差ない。然して年齢構成を見るに、〇―四歳の年齢階級の増加が著明で九四名より三〇七名と約三倍の増加を示し、その全體に對する割合も昭和十一年の二三・八%より二八・九%と二倍餘の増加をなし、又昭和十三年の人口増加の大半を占めてゐるのである。然して著者の視察せし昭和十五年に於ては人口数は一四九二名となり、同様五〇%の増加となり、こゝに於ても〇―四歳の年齢階級の増加が著明である。尙年齢階級及壯年以上の年齢人口の増加も年と共に著明であるが、昭和十五年に到りても尙未だ年齢構成の凹入部を補ふには到つてゐない。以上四回の年齢構成の割合の變化を〇―四、五―一九、二〇―三九、四〇歳以上の四階級に就て比較すると、

昭和九年	一・一五	二・六八	九五・七九	〇・三八
昭和十一年	一三・八八	九・六〇	七五・六二	〇・八九
昭和十三年	二八・九一	八・二八	六一・四九	一・三二
昭和十五年	三三・五七	八・五一	五六・五一	二・四一

となり、前述せる年齢構成の變化の状態を容易に知る事が出来、更に第二圖に就て見ると〇―四歳人口の年と共に増加すると同時に夫妻の年齢階級が年と共に上昇する事を觀察する事が出来る。

二、第四次哈達河、第五次黑臺開拓團

農村移民として家族移民を原則とする事は滿洲開拓民の場合に於ても例外は認められないが、初期の開拓團は既述せし其の成立の特殊的性質により變態的發展經過をとつたものであつて、第三次開拓團以降は年齢の制限も又既教育在郷軍人と云ふ資格的制限も漸次緩和され、開拓者中の既婚者

の割合も次第に増加するに到り、漸次家族移住の形式をとるに到つて來たれば、前項千振開拓團に於ては家族招致を始めた際、その大部分が妻に限られて老人、子供の入植するもの少なりしに反し、第三次以後の村に於ては既婚者の割合が多くなり、招致家族中に子供も多く、又全戸移住の家族も増加するに到つた爲に老人の入植するものも多くなるに到り、この傾向は入植年次の増加と共に著明になつて來た。

次に掲げる第六表及び第七表は第四次哈達河開拓團及び第五次黑臺開拓團の昭和十五年八月末現在の現住人口及その年齢構成を示すもので、第三圖及第四圖はこれを圖示したるものである。

第六表 第四次開拓團哈達河村現住人口年齢構成

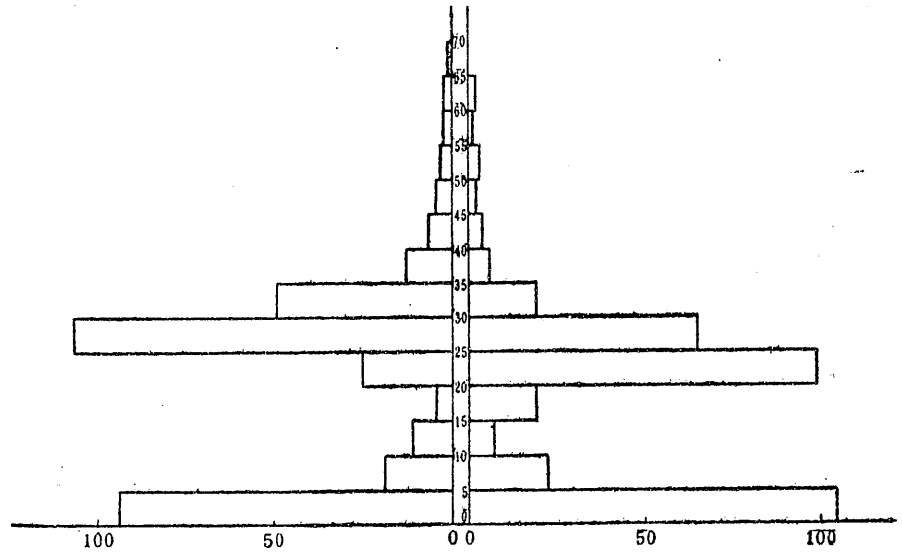
年齢	男	女	計	百分比
0-4	七三	九七	一七〇	二九・六七
5-9	二一	一七	三八	六・六三
10-14	三	八	一一	一・九二
15-19	八	一二	二〇	三・四九
20-24	九	五八	六七	一一・六九
25-29	九五	七五	一七〇	二九・六七
30-34	四九	一五	六四	一一・二七
35-39	一六	五	二一	三・六六
40-44	一	一	二	〇・三五
45-49	二	一	三	〇・五二
50-54	一	一	二	〇・五二
55-59	一	一	二	〇・五二
60-64	一	一	二	〇・五二
65-69	一	一	二	〇・五二
70-74	一	一	二	〇・五二

第七表 第五次開拓團黑臺村現住人口年齢構成

年齢	男	女	計	百分比
0-4	九四	一〇五	一九九	二八・六七
5-9	一九	二二	四一	五・九一
10-14	二一	七	一八	二・五九
15-19	四	一九	二三	三・三一
20-24	二五	九九	一二四	一七・八七
25-29	一〇七	六五	一七二	二四・七八
30-34	四九	一九	六八	九・八〇
35-39	一三	六	一九	二・七四
40-44	六	四	一〇	一・四四
45-49	四	二	六	〇・八六
50-54	三	三	六	〇・八六
55-59	二	一	三	〇・四三
60-64	二	二	四	〇・五八
65-69	一	一	二	〇・一四
計	三四〇	三五四	六九四	一〇〇・〇〇

哈達河開拓團の昭和十五年八月末現在の現住人口は、男二七九名、女二九四名、合計五七三名にして、男女の占める割合は男四八・七%、女五一・三%で男女略等しい状態を示してゐる。今その年齢構成を見るに前項の千振に見られたると同様の年齢構成の特殊性を見る事が出来、即ち乳幼児期、青壯年齢階級の膨出と學齡期児童及老齡者の年齢階級への凹入が存在することを知り得るのである。哈達河開拓團は昭和十年の入植で、入植後已に五年を経過してゐるを以て、前項千振開拓團の入植後五年目たる昭和十三

第三圖 第四次開拓團哈達河村現住人口年齢構成圖

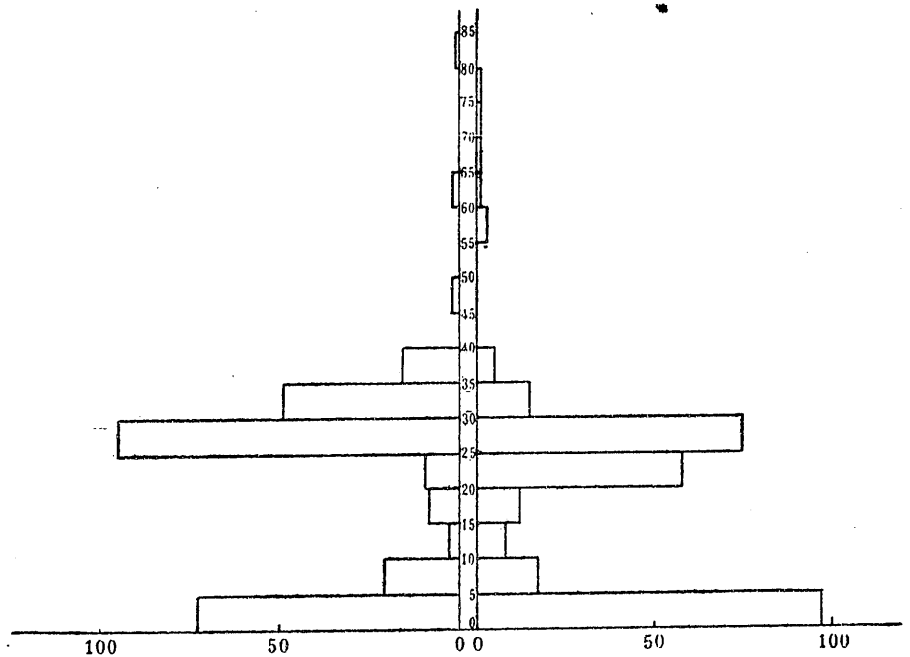


年の同時期の年齢構成と比較してみると、次の様な関係となり、

哈達河	〇—四歳	五—九歳	一〇—一三歳	一四—一七歳	一八—二四歳	二五—三九歳	四〇歳以上
千振(昭和十三年)	二九・六七	一一・〇四	五六・二〇	二・〇九	二八・六四	八・二一	六一・八五
	一・三三						

〇—四歳の年齢階級では兩者に差はないが五—九歳の學齡階級に於ては千振の八・二％に比して、哈達河は二二・〇％に及び殊に五—一四歳の階級では千振の四・一〇％なるに對し哈達河は八・五五％の多きに及んで

第四圖 第五次開拓團黑臺村現住人口年齢構成圖



居り、又四〇歳以上の年齢に於ても千振の一・三三％に對し哈達河は二・〇九％になつてゐる。五—一四歳の注目すべき増加は既婚者の入植が増加したる爲に内地にて出生せし兒が同伴入植せし結果にして、又千振の年齢構成に見る事を得ざりし高齢者を見ることである。

第七表の第五次黑臺開拓團に就て見ると、昭和十五年八月末現在の現住人口は、男三四〇名、女三五四名、合計六九四名にて、男女の占める割合

は男四八・九九%、女五一・〇%にして殆ど等しく、その年齢構成を見ると千振、哈達河の二村に見られたると同じ事が見られるが、各年齢階級の割合を前と同様調べてみると、

〇—四歳	五—一九歳	二〇—三九歳	四〇歳以上
二八・六七	一一・八二	五五・一九	四・三二

の如くなりて、千振、哈達河に見られたる開拓農村特有の年齢構成型を見る事が出来、且つ黒臺開拓團は昭和十一年の入植で、四箇年を経過してゐるが、これを千振の昭和十一年及昭和十三年の年齢構成と比較すると哈達河に見ると同様の事を言ふ事が出来る。

三、第六次宮城村、第八次樺林栗熊村開拓團

以上前に記せる千振、哈達河、黒臺の三者は開拓事業の創成期に入植せるもので、著者はこれ等の開拓團の人口状態に就てその年齢構成より觀察したが、最近入植せる開拓團の年齢構成は如何になつてゐるか、第六次宮城村開拓團及び第八次樺林栗熊村開拓團に就て觀察してみる事とする。

開拓事業は昭和十一年八月に日滿兩國の國策として取り上げられ、日本政府は昭和十二年以降二十年間に百萬戸を移住せしめんとする大量移民計畫を實施することに決し、滿洲開拓民は國策移民としての刻印が捺され、益々農業移民として本質的の家族移民としての體型をとるに到つた。

團の構成も第四次迄の移民團が多きは十數府縣、少くも數府縣の出身者より成つてゐたが、第五次移民に到り初めて黒臺信濃村なる單一縣出身者を以て組織せられたる一開拓團が出来、この一縣單位の開拓團は出身縣との聯絡上にも、又風俗習慣、生活態度も略、同一であつて、團經營上には在來の府縣聯合型より便宜なる點多くあるを以て、次第にこの形式をとるに到り、即第五次に於ては僅かに一集團に過ぎなかつたこの縣單位の開拓團

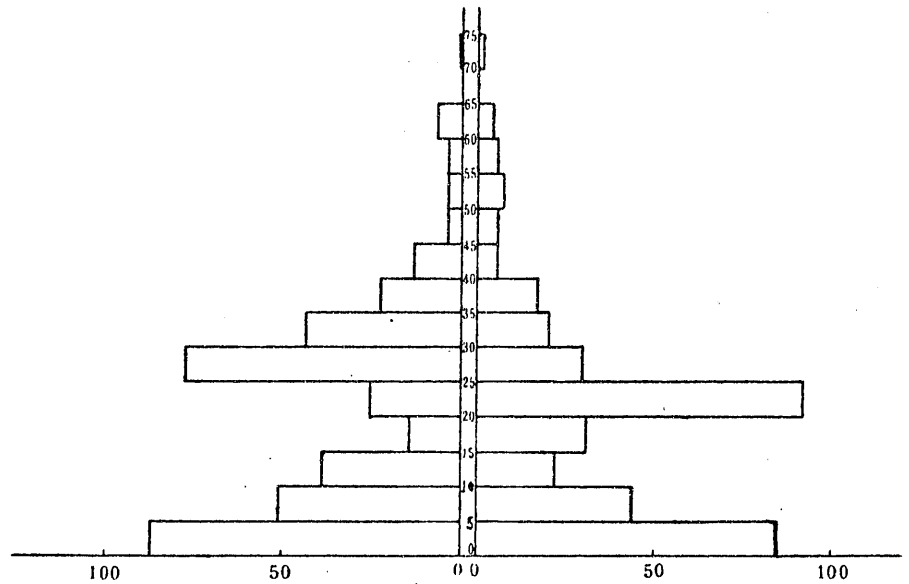
は第六次に於ては十八集團中の過半数に當る十一集團を占めるに到つて、その後も年々増加する傾向を示してゐる。

第六次宮城村開拓團はその名の示す如く宮城縣出身者を以て組織せられたるものにして、昭和十五年八月末現在の現住人口は、男三九二名、女三八八名、計七六〇名にして、男女の全體に對する割合は、男五一・五八%、女四八・四二%で略、等しいが前項の二村に比べ男の方が稍、多い。然して現住人口の年齢構成を見るに第八表第五圖の如くにして、之を見て直ちに氣付く事は二〇—三九歳の人口即夫妻の數に對して五—一九歳の年齢の凹入部が千振、哈達河、黒臺の三開拓團に比して、淺い事である。

第八表 第六次開拓團宮城村現住人口年齢構成

年 齡	男	女	計	百分比
〇—四	八七	八五	一七二	二二・六三
五—九	五一	四四	九五	一二・五〇
一〇—一四	三九	二二	六一	八・〇三
一五—一九	一四	三一	四五	五・九二
二〇—二四	二五	九二	一一七	一五・三九
二五—二九	七七	三〇	一〇七	一四・〇八
三〇—三四	四四	二〇	六四	八・四二
三五—三九	二二	一七	三九	五・一三
四〇—四四	一三	五	一八	二・三七
四五—四九	四	五	九	一・一八
五〇—五四	四	七	一一	一・四五
五五—五九	四	五	九	一・一八
六〇—六四	七	四	一一	一・四五
六五—六九	一	一	二	—
七〇—七四	一	一	二	—
計	三九二	三八八	七六〇	一〇〇・〇〇

第五圖 第六次開拓團宮城村現住人口年齢構成圖



宮城村開拓團の入植は昭和十二年にして、入植後三年を経過して居れば、これと同じ期間を経たる昭和十一年の千振開拓團の年齢構成と前と同様の年齢階級に分け比較して見るに、

年齢階級	千振(昭和十一年)	宮城村
0-4歳	一三八八	〇一四歳
5-9歳	九六〇	五一一九歳
10-14歳	七五・六二	二〇一三九歳
15-19歳	〇・八九	四〇歳以上
20-24歳		二二・六三
25-29歳		二六・四五
30-34歳		四二・八九
35-39歳		七・八九

社會生物學見地より見たる滿洲開拓農村 第二報・開拓農村人口の年齢構成に就て

の如くなりて、千振に於ては〇一四歳の年齢階級の人數が入植後三年では一三・八八%に過ぎないのに反し、宮城村では二二・六三%の多きに互り、又五一一九歳の主として學齡年齢に於ては千振の九・六〇%に對し、一六・四五%の斷然高い割合を示してゐる。この五一一九歳人口の割合は入植後の經過年數の更に多い哈達河、黑臺の二村に比しても多く、この起因する處はこの宮城村が家族移民としての體型を前二者より更に多く備へ、既婚入植者多く、〇歳人口に現地出生のものも含んでゐるが、〇一四歳の大部分は内地に於て生れ、父母と同伴入植せる結果に依るものである。然して四〇歳以上の年齢階級に於ても千振の夫れより高く、農業移民としての家族移民の體型は滿洲開拓民にも完全に第六次の開拓團編成の昭和十二年の頃より備つたものと思惟して可なるものがある。

團の構成が府縣の集合型より同一縣人を以て組織構成せる單縣型へと變化すると同時に今一つの大きな變革は、滿洲開拓政策基本要綱に示めさるるが如く、内地農村の更生を期せんとする所謂分村計畫の擡頭である。分村移住は當初宮城縣遠田郡南郷村に於て形成され、早くも第五次黑臺開拓團中に南郷區なる一部落を形成し入植したのが此種の計畫の嚆矢であるが、一分村移住者のみにて一集團を編成入植したるは第七次開拓團に於ける長野縣南佐久間郡大日和村の分村たる四家房開拓團を以て第一とする。

著者の視察したる樺林開拓團は、四家房大日和村に續き第八次開拓團中分村計畫を以て移住した八開拓團の一つたる香川縣綾歌郡栗熊村の分村である。著者の同僚北山氏が視察したる結果に依れば、同村は耕地狹隘にして集約經營を高度化するも過剩人口、過剩勞力の合理的配分は不可能であり、出稼するもの多數に上る狀況にあつた。昭和八年經濟更生計畫樹立村に、昭和十一年には特別助成村に指定され、鋭意經濟更生に努力したが懈

決の方法を發見し得ず、遂に土地、人口、戸數の根本的調整を計らんとし「本村ノ人口問題ヲ解決シ村ノ更生ヲ期スル爲、昭和十二年七月過剩人口ヲ今後十箇年間に滿洲ニ移住セシムル計畫」を樹立するに到り、昭和十四年二月現地に入植するに到つたものである。

昭和十五年八月末現在の榊林栗熊村の總人口は、男一八〇名、女二二〇名、計三〇〇名にして、男女の割合は男六〇・〇〇%、女四〇・〇〇%で、男の方が女より多い。村内に於ける戸數は一一一戸で、内五七戸は家族招致を終り、五四戸は未だ家族をしない團員で組織されてゐて、これが男性超過の原因となつてゐる。今この二九七名の年齢構成を見ると第九表及第六圖の如くにして、宮城開拓團に見たるより以上の著明の現象は、五―一九歳の多き事であつて、五―九、一〇―一四歳に殊に著しい人數を示してゐる。前述各村と同様に四年齡階級に分ちて見るに、

〇―四歳	五―九歳	一〇―一四歳	四〇歳以上
榊林栗熊村 一四・〇〇	二九・六七	四五・三三	一〇〇・〇
千振(昭和九年)	一・二五	二・六八	九五・七九
			〇・三八

の如くなり、入植後未だ一年有半のみ経過せるに過ぎないのに拘らず、五―一九歳の年齢階級の占める割合は最も高く、又千振の入植後一年を経たる昭和九年の年齢構成に比較すると前記の如く、千振の〇―四歳が全體の一・二五%、五―一九歳の二・六八%に對し〇―四歳一四・〇〇%、五―一九歳二九・六七%と斷然多きもののほり、これ等は全て分村により父母と共に移住し來れる子供である事は宮城村の場合と同様であるが、更に家族移住の傾向の度を増したものと云へる。然して年齢構成圖は最もピラミッド型に近きことは一見して知る事が出来るが、唯多少異なるのは、二〇歳以上の年齢階級に於ける男性の超過による膨出のあることであつて、この原因とし

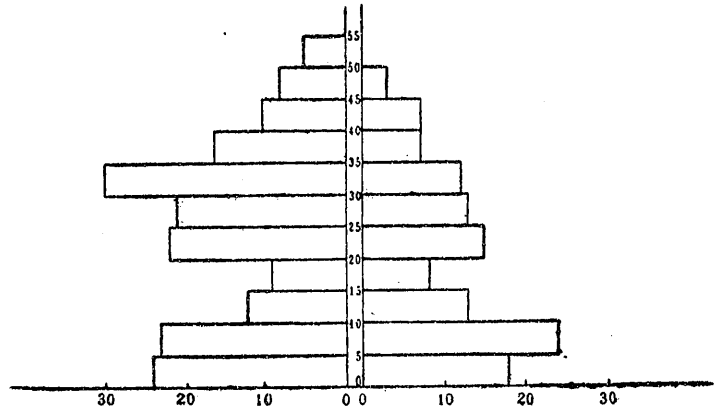
て考へられるものは未だ家族招致をせざる五四戸の團員である。入植直後の栗熊村の人口状態が、理想的の年齢構成のピラミッド型に近似の状態をとるとはいへ、この五四名の家族未招致の團員が家族招致したる際、如何に年齢構成の變化を來すかは興味深き事であつて、今後の觀察に待つべきものなれども、今その五四名の年齢を調べるに、第九表括弧内の如くにして、その半數は三〇歳以上にして二五歳以下のものは十數名に過ぎないことより考察するに、五四名の團員中に相當の既婚者を含んでゐることと推定しても可なりと思へる。然る時これ等團員の招致する家族は千振の初期に招致せる家族は妻が大部分なりし事に反し、相當の妻以外の家族、主として子供の入植を期待する事が出来、年齢構成も五―一九歳に急激なる凹入部を生じないであらうと豫測して可なりと思へるのである。

第九表 第八次開拓團榊林栗熊村現住人口年齢構成

年 齡	男	女	計	百分比
〇―四	二四	一八	四二	一四・〇〇
五―九	二三	二四	四七	一五・六七
一〇―一四	一一(一)	一三	二五	八・三三
一五―一九	九(二)	八	一七	五・六七
二〇―二四	二二(一二)	一五	三七	一二・三三
二五―二九	二二(一二)	一三	三四	一一・三三
三〇―三四	三〇(二三)	一二	四二	一四・〇〇
三五―三九	一六(五)	七	二三	七・六七
四〇―四四	一〇(二)	七	一七	五・六七
四五―四九	八(四)	三	一一	三・六七
五〇―五四	五(二)	一	五	一・六七
計	一八〇(五四)	二二〇	三〇〇	一〇〇・〇〇

註 括弧内ハ未ダ家族招致ラセザル團員數ナリ

第六圖 第八次開拓團樺林栗熊村現住人口年齢構成圖



附、滿洲人農村張家村

滿洲開拓農村の現住人口の年齢構成に就ては以上の五箇村に就て述べたが、その附近の滿洲人農村に就ては如何なる状態にあるか、幸ひ民生部厚生司の厚意で三箇村を觀察する事を得、その詳細は何れ機會を見て報ずる事とし、その内の一箇村張家村に就て述べて見る事とする。

張家村は牡丹江省寧安縣内の一農村にして、圖佳線寧安驛より約五軒の地にある。同村は村内古老の言によれば約二百五十年前、清朝の初期に北邊塞外の守備に任ずる爲移駐せし滿洲八旗の一つが定住せしところで、張家村の名稱はその隊長張氏の姓より來れるもので、一旗その家族を含めて約二千人の移住を見たるもの様である。昭和十五年八月十五日現在、同

村の現住人口は、男九二九名、女八六〇名、計一、七八八名で、男女の全體に對する割合は男五一・九六%、女四八・〇四%で男女の割合は略、等しい。然してその年齢別人口數を見ると開拓農村の夫れと異り、昭和十年内地人口の割合に非常に近似し、年齢構成のピラミッド型は圖示せずとも明かであつて、年齢の上昇と共にその數を減じ、特に特殊の年齢の凸出凹入を見る事は出來ない。強いて言へば一五—二九歳の年齢階級の男に多少の凹入を見る事が出来るが、内地農村の夫れに比せば輕微のものであつて健全なる人口状態を示すものと思はれ、完全なる發達を遂げし移住村の一つと見てよい。こゝに特に注目すべきは同村に於いてその一端に半島同胞の移住部落があり、その現住人口の年齢構成の状態である。

朝鮮同胞の滿洲移住の歴史は到つて古く、朝鮮人は清の初期頃より滿洲へ移動するもの多く殊に明治初年朝鮮に五箇年に續く大凶作ありて、爲に北朝の住民相次いで南滿へ移住するに到つた。これが鮮農の滿洲への集團的定着移動の濫觴であつて、爾來不當なる地主の搾取と横暴なる軍憲の誅求、或は更に妨害、暴行を忍び次第に定着増加を加へて行つたが、何といつてもこの鮮農の移動に拍車をかけたのは滿洲事變であつて、滿洲へ移住するもの急激に増加し來つたものである。

張家村に於ける鮮農部落も之れと同様であつて、村公所當局者の言によつて鮮農の當地に定着しはじめたるは約二十年前であり、當時は到つて數少く微々たる存在であつたが、滿洲事變後急激に増加し、現在八九戸に達してゐる。この八九戸の張家村鮮族の昭和十五年八月十五日現在の人口數は、男二二七名、女二一三名、計四四〇名で、その年齢構成は第十一表及第七圖の如くである。

この年齢構成を見て注目すべきは、八九戸四〇〇名に過ぎない一部落で

はあるが、その年齢構成は完全なるピラミッド型を呈してゐる事である。即ち〇―四歳の六七名(一五・二三%)を最も多しとし、年齢階級の増加と共に多少の凹凸はあるが、その數を減じ、開拓農村と同様四階級に分つ時は

〇―四歳 五―九歳 一〇―一三歳 四〇歳以上
 一五・二三 三三・六三 三三・二七 二一・八六

となり、既述の開拓農村に見る事の出来ない程昭和十年の内地人現在人口の割合に似てゐて最も完全なる人口状態を示してゐると言ふ事の出来るはその移住に當り一家同族全て共に移住せるもので、分村に近い即分郷の形をとりて家族移民をなせる結果であつて、開拓政策遂行上大いに参考として良きものと思へる。

第十表 張家村現住人口滿洲人年齢構成

年齢	男	女	計	百分比
〇―四	九五	一二五	二二〇	一一・三〇
五―九	一一九	一一〇	二二九	一一・八一
一〇―一四	一二三	九一	二一四	一一・九七
一五―一九	七九	九三	一七二	九・六二
二〇―二四	六八	六三	一三一	七・三三
二五―二九	八二	七〇	一五二	八・五〇
三〇―三四	五三	七〇	一二三	六・八八
三五―三九	五二	五六	一〇八	六・〇四
四〇―四四	六八	三八	一〇六	五・九三
四五―四九	四九	二九	七八	四・三六
五〇―五四	四一	三二	七三	四・〇八
五五―五九	三一	二九	六〇	三・三六
六〇―六四	三四	一三	四七	二・六三
六五―六九	一二	一九	三一	一・七三
七〇―七四	一五	一四	二九	一・六二

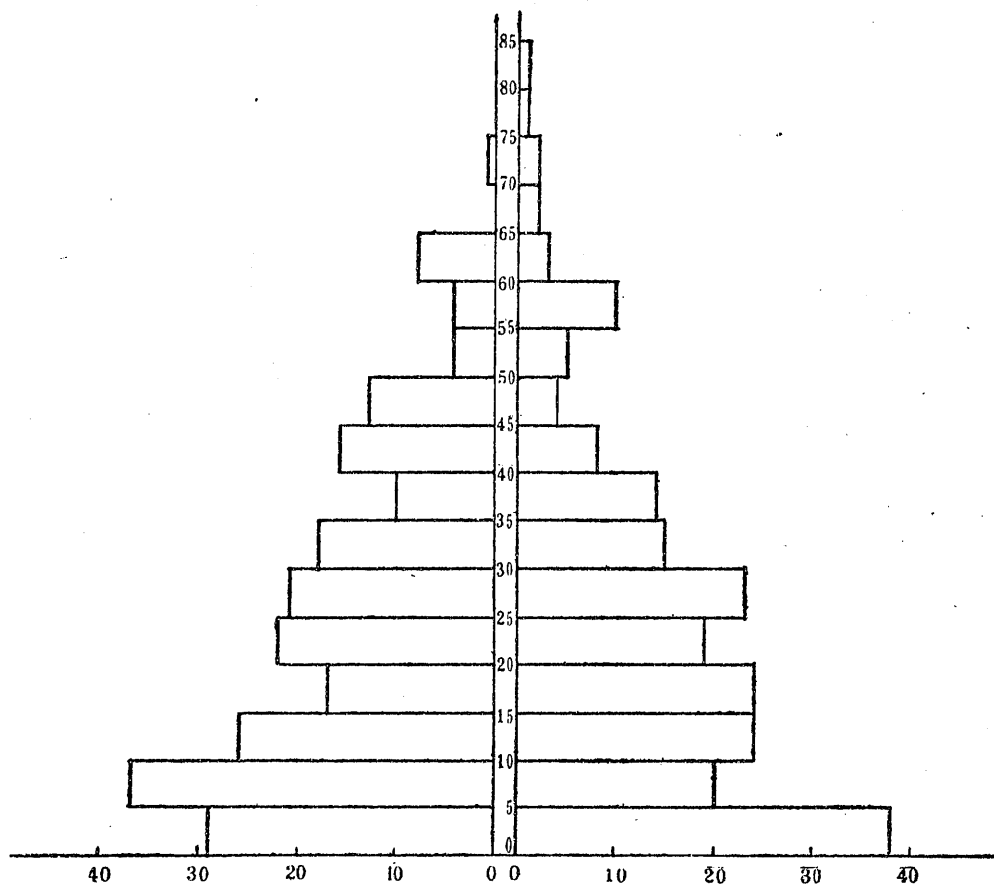
第十一表 張家村鮮農部落現住人口年齢構成

年齢	男	女	計	百分比
〇―四	二九	三八	六七	一五・二三
五―九	三七	二〇	五七	一二・九五
一〇―一四	二六	二四	五〇	一一・三六
一五―一九	一七	二四	四一	九・三二
二〇―二四	二二	一九	四一	九・三二
二五―二九	二一	二三	四四	一〇・〇〇
三〇―三四	一八	一五	三三	七・五〇
三五―三九	一〇	一四	二四	五・四五
四〇―四四	一六	八	二四	五・四五
四五―四九	一三	四	一七	三・八六
五〇―五四	四	五	九	二・〇五
五五―五九	四	一〇	一四	三・一八
六〇―六四	八	三	一一	二・五〇
六五―六九	一	二	三	〇・六八
七〇―七四	一	二	三	〇・六八
七五―七九	一	一	二	〇・二三
八〇―八四	一	一	二	〇・二三
計	二二七	二二三	四四〇	一〇〇・〇〇

四、總括及結論

著者は昨夏滿洲を旅行し視察し得たる開拓農村五箇村に就て現住人口を觀察し、同時に開拓事業の推移を研究し次の様な結果を得た。

第七圖 張家村鮮農部落現住人口年齢構成圖



一、何れの開拓農村に就て見るも、その年齢構成に特異なる形態を有してゐる。即、壯年人口及び〇―四歳の幼少人口が全人口の大部分を占め、老齡人口及青少年子女の年齢階級の人口が少く、その年齢構成圖を見るに〇―四歳と二〇―三九歳との年齢階級の極端なる膨出と五―一九歳と四〇歳以上の年齢階級に著明なる凹入とを見る事が出来る。

社會生物學見地より見たる滿洲開拓農村 第二報・開拓農村人口の年齢構成に就て

二、第二次千振開拓團に就て入植後人口増加の状況を累年の見ると、最初は二〇―二九歳の男子のみの状態で、これより約二年をして妻の入植を見、これより兒を擧げ〇―四歳の人口が表れて來る三段階をとり、この間家族の一部が入植し、五―一九、四〇歳以上の人口も増加するが、その數は至つて少ないものである。

三、總人口に對する男女の占める割合に就て見ると、入植後日淺き頃は男の方多く年と共に男女の差は減じ、移住完了と共にその割合は略々等しく稍、女が多くなるものゝ如く、千振は最もこの變化が遅い様である。

四、かゝる特異なる人口現象は未婚の團員を以て組織されたる結果で、既婚者を以て組織されるに従ひ年齢階級人口の割合もその特異性が少くなつて來、五―一九歳の年齢階級人口の占める割合も次第に増加し、男女の割合も最初より差が著しく無く、滿洲開拓集團移民も次第に家族移民としての體型を整へて來つゝある事を知る事が出来る。

五、比較として掲げたる牡丹江市に近い張家村の人口状態を見るとその年齢構成は日本内地の農村の如く都市の影響による青壯年人口の減少の傾向は未だ見る事が出来ない。

日本に於ける殖民事業の歴史を考へる時、先に明治初年の北海道開拓事業あり、又日清日露の戦役後の臺灣、滿洲の拓殖事業あり、その何れに於ても好成績を擧げたりと斷言するにはどうかあるものがある。この原因の奈邊にあるかは一概に言ひ得ないが、開拓事業は唯數年にしてその結果を結ぶものではなく、相當長期間を経るに非ずんばその効果を論ずる事は出來ない事よりして確固たる方策が樹立され、その目的に對して邁進實行されるべきである。この方策樹立に當りては單に數年を見込しての瞬間的思考による立案は除外されるべきで、社會經濟保健衛生各方面の正しい根據に立

脚されるべきである。殊に今次の滿洲移民は滿洲開拓政策基本要綱にも明記さるゝが如く、その崇高なる使命達成には殊にこの點が強調されるべきで、將來の完全なる質及量的發展を期待するにはあくまで農業移民としての本來の型たる家族移民の形式がとらるべきである。開拓村建設に當りては各種の方法ありて、一部識者の注目の的となつてゐる青少年義勇軍も已に第一回生は小訓練所の過程を終り現地入植を行ひ、一村を形成するに到つてゐるが、經營、保健の兩觀點より問題とされる開拓村人口の年齢構成より將來を推察すると、千振開拓團と同様の發展經過をとるものと思はれ、完全なる人口構成をとるには數十年後を期待するに過ぎない。これ等よりして推稱されるべきは栗熊村の分村計畫の如き、家族移民の形式である。張家村に於ける鮮農部落が最近十年にして已に健全なる人口状態を示す事も彼等の移住が本質的の家族移民としての形態をとりしが爲であつて、將來の開拓村建設は家族移民の形式が是非とられるべきものであると信ずるものである。この點最近分村計畫による開拓村が増加の傾向を見せてゐるのは喜ぶべき事であるが、實際問題として一箇村より二百乃至三百戸の一開拓團を編成選出する事は人選並に母村の受ける經濟的影響より判斷するに種々困難の場合が多いので、こゝに第九次移民に見られる分郷計畫こそ望ましきものである。即、分村開拓團は單一町村の出身者によりて編成されるに反し分郷計畫は一地方(即ち一郷)の數箇村の出身者より編成せられるもので、入植後の團員の結合及出身地との聯絡に於ては分村計畫に劣るが、編成及入植後の母村への影響は分村計畫に勝るものである。その何れにしてもその望まるゝものは家族移民であつて、この家族移民によりてこそ滿洲開拓の本來の使命が全ふせらるゝものである。

主要なる參考文獻

- (一) 第一報に參考とせしもの
- 一 人口統計要覽(人口問題研究所 昭和十五年)
 - 二 矢ヶ崎徳藏 民族生物學研究第一輯昭和十一年
 - 三 柚木祥三郎 臨床大陸 一卷七號
 - 四 近藤通世 日本婦人科學會雜誌 三一卷一三號
 - 五 洲崎隆一 近畿婦人科學會雜誌 八卷三號
 - 六 篠田 紘 日本婦人科學會雜誌 三一卷五號
 - 七 岡崎文規 人口問題研究 一卷七號
- (二) 第二報に參考とせしもの
- 一 昭和十年國勢調査報告 全國編
 - 二 在阪朝鮮人の生活狀態(大阪府社會課 昭和九年)
 - 三 滿洲開拓年鑑(昭和十五年)
 - 四 西野陸夫 日本公衆保健協會雜誌 十六卷十號
 - 五 北山正邦 人口問題研究 一卷二號
 - 六 滿洲農業開拓民事業概要(滿洲拓植委員會事務局 昭和十五年)
 - 七 開拓地衛生關係資料(滿洲拓植公社 康德七年)

ナチス民族人口政策摘要(三・完)

本 多 龍 雄

目 次

- 其の一 所謂アリアン立法、特にユダヤ人排斥
- 其の二 國民優生政策、民族逆淘汰への挑戦
- 其の三 母子保護政策、特にナチス國民厚生團の活動(以上第四號)
- 其の四 婚姻及び出産獎勵政策